

演劇の原点を問う群像劇

土屋 康範

「あなたに会えてよかったです！」というメッセージが真っ直ぐに胸に飛び込んで来た。音楽の力も大きい。願いを込めてみんなで歌い踊れば心が通じ合える「まつり」が描かれたが、これは「演劇が我々にとっていかなる存在か」原点にかえって問う切実なメタシアターであると気づき、ハッとさせられた。

舞台美術の放射状の構造と上下左右に展開する俳優たちの動きが劇世界の広がりを感じさせたのがいい。マスクで表情が見えないのを補って余りあるほど俳優たちの身体が雄弁だったのは4年間の訓練の成果だろう。さらにエイリアンの登場、街の慕情、モグラと月の対話など各場面で照明が雰囲気を出しているのに大活躍していたのも印象的だった。衣裳はオレンジと緑、赤と青といった配色のコントラストが絶妙。キャストもスタッフも全員見せ場を持つ群像劇を作れるとは、上演制作実習のコンペで切磋琢磨してきただけはあると頼もしく感じた。

ただ欲を言えば、人物同士がお互いに影響を与え合う過程がもう少し丁寧に描かれてもいいのかなと感じた。3名ずつの多様性のあるグループを順々に登場させる作劇法だったが、90分の上演時間の中では人物たちの提示に終わったところがある。しっかりした劇の組み立ての中で全員を活かす道もあったのではないかな。ここは今後の課題であろう。

四期生は日頃、自主公演を活発に行い、自分の思いを形にする意欲が強い人たちだ。そして、その分「今の自分でいいのか」と自問してきた。劇の終盤、登場人物たちが「このままで終わりたいくない」と口々に願望をつぶやく場面はそんな四期生の姿と重なって見えた。